工学院大学主催

第９回　高校生の建築フレッシュ・アイデア・コンペ

文の部門　優秀賞

「私の好きな町″蒲原宿″に住み続ける」

静岡県立科学技術高等学校　久保田章斗さん

私の好きな町“蒲原宿”に住み続ける

私の住む静岡県蒲原には「仕事の減少」「東海大地震の直撃」など住み続ける上で弊害になる問題がある。そこで、蒲原に住み続けるために、かつて栄えていた宿場町を中心に問題解決の方法をここに提案する。そして、宿場町から地域全体へと、住み続けていくための活動の輪を広げ、蒲原の存続に繋がることを目指す。

[きっかけ]

私の住んでいる蒲原は大地震に備え安全な地域に避難したり、地元の仕事減少などが理由で、人が離れていっている。昔は、良いところがたくさんあった。例えば、近所との付き合いだが、非常に親近さがある。私が小学生の頃に、デイサービスボランティアで知り合ったおばあさんとたまたま家が近所だった。毎朝会うたびに「おはよう、いってらっしゃい」と声を掛けては手を振ってくれる関係にまでなっていた。しかし、今は近所の方と日常で顔を合わせる機会が少なくなったので、つながりが薄くなってきたと感じた。一方で、住環境も快適なところが魅力である。南には駿河湾が広がり、町には海風が入ってきて心地よい。北には、緑豊かな山が連なっていて開放感がある。都市化していく時代の中で、海と山を独り占めしているのは蒲原ならではの地域性である。このように、蒲原は人の心が温かく、住環境も良いため、住み続ける意味があるのだ。しかし蒲原には、「仕事減少」や「東海大地震」の危機が迫っている。それが、「住み続けられなくなる」ことの素因となる。好きな町の衰退を防ぐべく、私

は何か良い対策がないかと思い迷った。

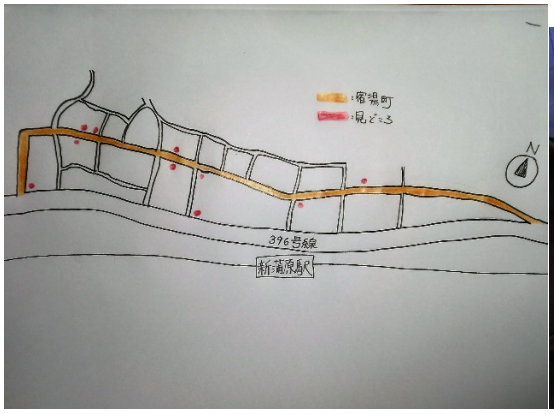

図１宿場町の地図　　図２宿場祭り

そして、ふと浮かんだのは中学生のときに参加した宿場祭だ。（図１．図２）これは、蒲原の情緒溢れる町並みをゆっくり堪能するための祭りである。この祭りこそが蒲原の良いとこづくめであった。１つ目は、今も残る旅籠や商家が並ぶ町並みが、かつての蒲原を感じさせてくれると思ったこと。２つ目は、宿場町内での住民のコミュニケーションが見られたこと。したがって、蒲原宿が中心になって、蒲原が活性化していける可能性は大きい。しかし、景観は将来に渡り維持されるのか、また住民同士のコミュニケーションは、普段から積極的ではない。そこで私が「住み続けられる宿場町」となるように、様々な提案をしていく。

[宿場町に住み続けていくために]

住み続ける町づくりには以下の４点を思案する必要がある。

①災害時に備えた対策案の創出

②宿場町内のコミュニケーションの育成

③景観の統一化

④後継者の輩出

これらの具体案を図版、写真とともに説明していく。

[提案]

①災害時に備えた対策案の創出

本来は、災害を未然に防ぐことが必要だ。そのため、宿場町の家々の倒壊を防ぐための建築的改良が必要になるが、実際問題として情緒ある町並みの裏には古い木材が利用されている上でのことなので、再生化など直接的に手を施すのは難しい。そのため、災害時についての対策を２つ考えた。１つ

目は、事前に行うべき対策として、避難経路や災害後の物資の確保等の検討を宿場町内ですることである。普段通れる道ががれきで塞がったり、災害時に物資が足りなくなったなど、急な状況に陥るのが災害の特徴でもあるので、事前の準備により格段に被害は抑えられるだろう。２つ目は、災害時に必要な連携を取れるようにすること。連携とは普段からコミュニケーションを取り、近所で顔が馴染んでいること。例えば、人員確認や安否確認を行う際に、連携が取れるならば、その場で住民同士が誰が居ないのかを把握し、早急に身元を確認して救助できる。このように事前にできることは東海大地震に備え、対策を練っていかなければならない。

②宿場町内のコミュニケーションの育成

上記で述べたように、コミュニケーションは日常から育成することが大事である。それは、顔をよく合わせる機会を作ることにより育まれると考えた。そこで２つ提案がある。１つ目は、宿場祭りで夜に足元を照らすためのライトを設置する

のだが、それを各家でデザインしてもらいたい。ライトには、駄菓子屋ならお菓子を、お休み処ならお茶のマークでも描いてもらう。（図３）それが、その家の特徴を表して周囲の人に知ってもらえる。２つ目は新しい活動として、各家が好きな裂織物（図４）を使って玄関に暖簾を飾ってもらう。これも、ライト同様の効果で家の好みを知ってもらえる。さらにもう１つ提案する。「朝７時半に暖簾を出す、夕方５時にライトを出す」のように時間を決める。そうすることで、住人が朝は、学生の登校時間に「いってらっしゃい」と、夕方には「おかえりなさい」と親の存在のように安心できる場を作ってくれる。最終的には強制して行っていたこの活動が自然なコミュニケーションの場として成り立っていってほしい。

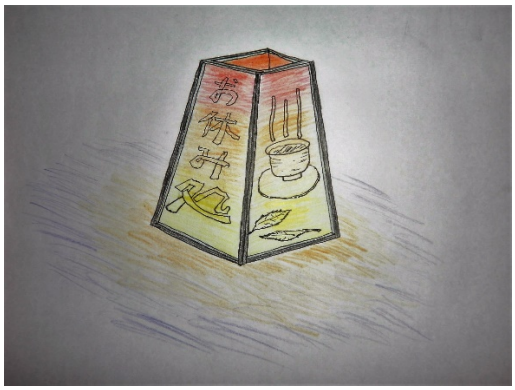

図３デザインしたランプ

図４裂織物

③景観の統一化

今現在の景観問題として４つ示す。１つ目は、一般住宅が入り混じっているため、かつての格子戸やなまこ壁などとの調和が取れてないことだ。しかし、ファサード全てを合わせても逆に旅籠などが引っ込んでしまうので、各家の玄関のデザインのみを統一するという提案をする。そこに、個性をもたらすために、格子を取り入れた上で、各家で違うデザインが多くあると地域性豊かな町並みになることが想像できる。２つ目は、電柱が気になること。提案として、電柱を昔のように木材にして街灯と一体化させる。（図５）結果、街灯とともに町並みに馴染むであろう。３つ目は宿場町の道路はクリーム色に統一しているが、駐車場がクリーム色で無かったりするので徹底的に道路の色は統一したいところだ。最後に車が気になると感じた。本気で景観の統一を目指すのであれば、別の場所へと駐車場を設けて、家の表には車が無いようにしたい。これら４つの提案が景観を良いものにする。それが宿場町の価値向上になり、蒲原の文化、歴史が一層伝わりやすくなる。

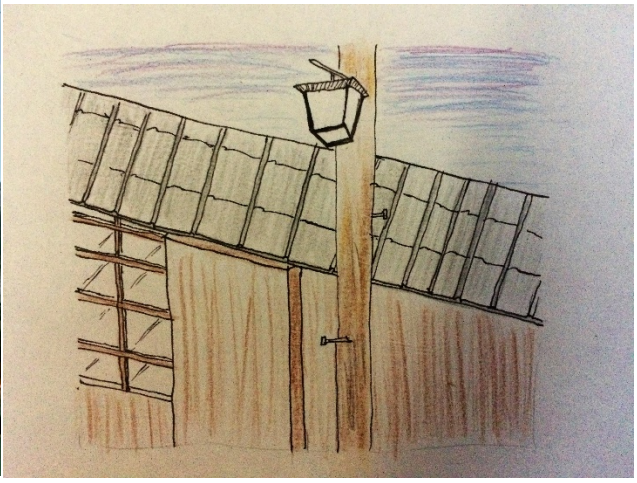

図５　元の電柱と街灯　⇒　電柱と街灯が景観に馴染む

④後継者の輩出

これまでに述べてきた３つのことを主軸として次の世代に引き継ぐための後継者が必ず必要である。その人自身に今後背負っていかなければという責任感や使命感が芽生えたことが初めて引き継いだといえる。そして、自立した意識が今後の地域を作ると考えている。そのために、私は「記憶で引き継ぐ」ことが大切だと思う。例えば風景の記憶で、朝と夜に暖簾とライトを家の前に出すことが子供のときは何となくやっていた習慣だが、大人になったときその活動の意味を再認識する。そのように頭の片隅にでも、風景としての記憶

が残っていれば、いつか意義を理解し、続けていかなければという感情が湧いてくるのだと思う。その記憶が引き継がれていくことで地域の伝統になったり、コミュニケーションの充実や景観の向上に発達したりする。記憶に残すためには、今から行う活動を習慣化していかなければいけない。

[２０年後の宿場町]

---私は、２０年ぶりに友人と宿場町に訪れた---

私　「全然雰囲気は変わらないね。」

友人　「そうだね。昔によくここを通った時に住人が集まって談笑してたのを覚えてる。」

私　「あ、ここはあの家族の家だっけか、まだあの暖簾が掛けてあるからなんとなく分かったよ。」

友人　「こっちの家は昔、駄菓子屋でお菓子を一緒に買ったね。」

私　「もう結構歩いたね。あ、あの人は自分達が学生の時によくお見送りしてくれてたおじいさんだよね。」

友人　「そうだね。意外と忘れないよね。」

私　「おじいさんお久しぶりです。お元気にしてましたか。」

おじいさん　「君達は毎朝、はしゃいで学校言ってた子だね」

私　「そうでしたね。つい、あのときはお見送りしてくれて

て、安心感がありましたのでつい。」・・・

あの頃から変わらない人の温かさが私に「宿場町を守りたい」

という想いを強くさせた。

今になって理解できた近所の人たちとの交流の素晴らしさ。

これから先も継続させていきたいと思った。

[最後に]

世代を渡っても共有する記憶が一緒だから、何年も守っていける町になっている。

しっかりとあのときに防災対策をしたから住み続けられた。

景観は昔より宿場町に近づいてきた。

ご近所さんと何十年も長い付き合いがあって安心して暮らせる。

蒲原宿は住み続けていける町になり、そこから蒲原全体へと文化や習慣が広がり、蒲原に住み続けられるようになる。